



シヨップで発信、地域社会に参画し貢献
「自然も動物も人間も共存できる世の中」へ
COEXIST <https://coexist-official.jp/>

想いが詰まったホンモノの製品を
全国に届けるトラック

COEXISTは厳選したエシカル製品とそのコンセプトを届けるシヨップ。あらゆる地域に伝えるため、SNSやEC開設、クラウドファンディングを経て2023年8月、ログハウスのような移動販売トラックを完成させ走り出した。現在取り扱うブランドは十数種類。歯ブラシや洗剤、コスメ、アークセサリーやポーチなど、日常生活で使えるアイテムがそろそろ。代表を務める菅原勤太（けいた）氏



▲COEXISTのオリジナルトラックと代表の菅原勤太氏。「排ガス対策として年に1回ブルーカーボン・オフセット（海藻などの洋生物を植栽し二酸化炭素の吸収を促進するプロジェクト）への協力を考えています」（菅原氏）

が自ら製造現場に直接出向いて視察したり、製品の生まれた背景やコンセプトを代表者に聞いたりする中で「感性に響くもの」（菅原氏）を選定。決め手は環境問題や社会課題の本質的な解決を手助けするもので、かつ、作り手の熱意が感じられるかどうか。COEXISTではそうした製品を「ホンモノ」と定義する。

東京・練馬出身の菅原氏は「身近な製品を通じて、作り手の想いや社会課題について知るきっかけを、地域を問わず様々な方に届けたい。地元の東京への思い入れから、トラックのボディには檜原村産の木材を使っています」と語る。

地域社会への参画を目指し日本一周

もともとサーフィンやスノーボードなどを通して自然に親しんでいた菅原氏は、大学4年時に休学し渡米。様々な都市の語学学校を転々としながら一年間を過ごした。現在の活動の原点とも言える体験について、同氏はこう振り返る。

「最初に生活したカリフォルニア州では、店舗で使い捨てビニール袋の使用が禁止されています（※）。正直なところ不便を感じたこともありましたが、一方で、学校の授業でビニール袋をウミガメが食べてしまうなどの被害について議論する機会があり、知らずに大好きな自然を傷つけていたことに衝撃を受けました。調べるうちに、一つの環境問題が他の社会課題と絡み合っていることが分かりました。また、社会課題について真剣に語る友人の熱意に心を動かされ、想いを伝えることや、そのような課題について知ってもらう機会を設けることに、使命感のようなものを抱きました」

帰国後、菅原氏は大学を卒業し大手企業に入社したが、希望していた太陽光関連事業への配属が叶わず2年で退職。もともと環境問題などをSNSで発信し続けていた中で起業を本格的に考えるようになった。（株）ボードレス・ジャパンの「ハチドリ電力」に立ち上げメンバーとして参画した後、2022年にCOEXISTを創業。

各地に出店する中で、菅原氏は環境問題などについて「まだ行動に移せていない人が多いと感じる」という。エシカル製品においても、首都圏と地方では認知度に差があ

る。一方「例えばその地域独自のサステナブルな生活習慣など、地方にも魅力的な伝統や文化がある」（菅原氏）と、地域の可能性にも着目する。

そこで目指すのが「2つの軸」に沿った活動だ。「シヨップでの巡回・発信」を1つ目の軸とし、各地域の担い手との関わりを深めながら、2つ目の軸に「地域の課題解決に当事者として参画すること」を見据える。その足掛かりとして、この4月15日から一年間の日本一周プロジェクトに取り組む。「地域の本来の良さに立ち返ることで、様々な課題を別の角度から解決できるのではないかと考えています」（菅原氏）

COEXISTは「自然も動物も人間も誰も傷つけない 共存できる世の中へ」というビジョンを掲げ、自らハブとなり社会や地域の未来を切り開く旅に出る。



▲全国の様々な地域に出向き、生活者に発信しながらも現地ならではの魅力を観察する

（※）…2014年、カリフォルニア州議会は小売店などでの使い捨てビニール袋の使用を禁止する法律を米国で初めて可決。同法案は16年に有権者による住民投票で承認された。新型コロナウイルスの感染拡大下では一時的に使い捨てビニール袋の無料提供が認められたが、2026年に再利用可能な厚手のビニール袋を含め全面的に禁止する新法案が24年2月に同州議会にて発表されている。